○メタセコイアの葉序(Phyllotaxis of *Metasequoia*)(前川文夫F. MAEKAWA)

本屬は三木茂博士によつて本州中部各地の第三紀下部鮮新層から發見記載された化石針葉樹であつて，最も特徴とする處は，毬果の鱗片が明らかな十字型葉序に排列すること，長い細い果柄があること，葉は二列生であることである。これらの特徴はスギ科(Taxodiaceae) 中ではむしろ異端者であるといつてよく，特に毬果の鱗片の排列はヒノキ科(Cupressaceae)の特徴を示して，それとの類緣をも示すかの樣である。枝は基部に鱗片葉の集りのある膨らみを持つたところから切れているから短枝的の性質が強く，その點は共存して產出するラクウショウ (*Taxodium* 北米に自生) やスイショウ (*Glyptostrobus* 中國南部に自生) と通づるものがある。昨年名古屋大學の學生諸君と尾張犬山附近の善師野で化石を掘つた時に多量に出て來た一見セコイヤと思はれる標品を後日精檢したところ，これが本屬であつたが，葉序についてみてもスギ科には入らぬことを見出した。三木博士の原記載（日本植物學輯報 **11**: 261 (1941)）には葉序についてはdistichous とあるだけであるが原圖 f.8.D を見ると葉は枝の左右に二列をなしている上に二葉づつ對生している。しかも葉の附根が左右交互に枝の正面へ心持乘り出すように描かれている。又前記の標品を檢すると葉はたしかに交互に方向が少しづつふれているので各側共に葉は一枚置きに高く浮き上つている。これは對生の十字型葉序を×の位置に置いて背腹面から偏壓したので葉身が見掛けの左右展開を示しているものと解釋できる。かく見て來ると *Metasequoia* は現在の材料の示す範圍では莖から毬果へ全體を通じて對生十字型葉序の連續した展開であることになり，Cupressaceae とみるべきか或はそれの原始形と見たいところである。洪積世に入つてはじめて *Thuja*, 及び *Chamaecyparis* の化石が見出されることも或は關連があらうかと思う。ただ Cupressaceae では十字型葉序が背腹に壓伏されしかも周期的異葉性がこれに加つているの違いがあるが，幼生葉は明らかに長い針狀葉を持ちヒムロの如きは全株かかる幼生葉を持つているなどからみても Cupresssaceae が現在の鱗片葉並びに背腹性十字型葉序をえたのは比較的新らしいものと思はれる。

この屬は滿洲及樺太にも產出があり曾つて *Sequoia* の名で記載されたが胡先驌博士は *M. chinensis* (Endo) Hu の新組合せを發表した。(Bull. Geolog. Soc. China **62**: 106 (1946)). しかも同報文中に湖北及四川兩省に本屬の自生が見つかつたことを述べている。それはスイショウに類するところがあつて落葉性であるというが，化石屬が現生する事實として注目に値する。後報が待たれると共に私としては早く葉序を確めたいと念じている。終りに胡博士の報文の借覽を許された本田正次教授に感謝する。

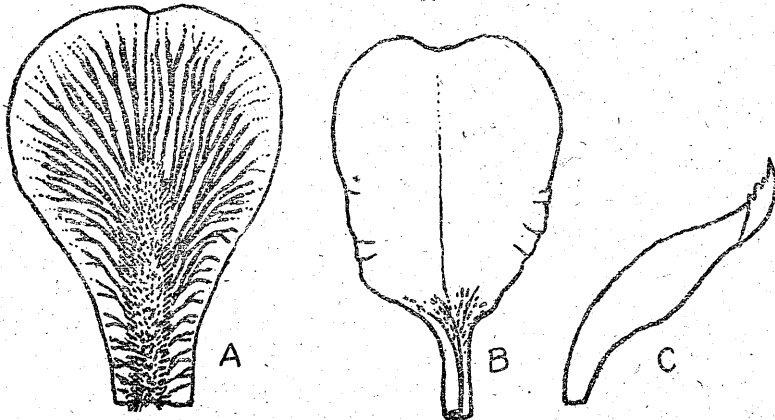
○メタセコイア追記（前川文夫）

Sequoia の產地である米國では，この生きている化石に多くの興味が惹かれているらしく，近着の Bull. Torrey Bot. Club **75**: 439-440 (1948) の短報によると，本年2月

に加州大學の化石學者 R.W. Chaney 氏と桑港の Chronicle の科學主筆 M. Silverman 氏とはこの生きた化石を採集するために空路重慶へ飛んだ。そして船で揚子江を下つて四川省の東部にある萬縣に上陸，まだ一人も西歐人の入つたことのないという石だたみの道を南方へ 100 哩ばかり辿つて自生地の Tiger valley（恐らく虎溪というのだらう）に 100 本以上の本種が生えているのを見出した。その場所は冬も氣候が溫和で海拔 4000 呎，附近の植生はクリ，ナラ，カンバが主でカツラの大木もあつたというのは興味がある。そうした樹林の中の溪流沿ひの濕氣たところに生えているが，こゝから 35 哩の北方には高さ 100 呎徑 11 呎の大木があつたそうだが，dawn red wood といつている位にセコイアメスギと似たところがあるらしい。

——昭和 23 年 8 月 31 日追記——

○日本に栽培される Pogoniris に關するノート（津山尙）

毎年庭內の花菖蒲が咲く毎に W.R.Dykes 氏の *Iris* 屬の上に打立てた偉業が偲ばれるのであるが，この數年來小生の注意を惹いてゐる其屬の一品があり，これに對してキツネアヤメの名を假に下してゐた。このものは元來オーストリア，トルコ，南露方面に

A. 外花蓋片，B. 內花蓋片，C. 柱頭の分枝の側面觀

廣く分布する *Iris variegata* L. であつて Pogoniris 節に入るべきものである。葉はハナショウブより厚く滑かで，高さ 30-50 cm に達し，外花蓋片は垂下しその中心部は淡ライラツク紫色で周邊部は漸次淡黃色になり，これらの上に褐紫色の網紋があり，これも又周邊部は漸次純紫色に變る。その中肋の中央以下には Pogoniris 節獨特の黃色の鬚毛を有する。內花蓋片は直立して三者相集り，倒卵狀楕圓形，淡黃色で，外片より稍々大形であり，爪部は溝狀をなし，その部にも亦淡紫褐色の點狀網紋を有する。柱頭分